



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	条件不利環境の観光資源化とその活用促進メカニズム : 「雪氷観光」の創造事例を対象として〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	福山, 貴史
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	乙第7190号
Issue Date	2023-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91361
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Takafumi_Fukuyama_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：福山貴史

審査委員	主査	教授	西山 徳明
	副査	教授	山村 高淑
	副査	名誉教授	高橋 修平（北見工業大学）
	副査	准教授	上田 裕文

学位論文題名

条件不利環境の観光資源化とその活用促進メカニズム

—「雪氷観光」の創造事例を対象として—

令和 5 年 10 月 16 日（506 会議室、12:00 開始）に行われた福山貴史氏の博士論文口頭試問は 2 時間にわたって公開で行われた。執筆者から論文の内容について発表をおこない、主査・副査からコメントの後、質問がなされ、それに対して執筆者が応答した。なお本審査に当たっては外部審査員として雪氷学の専門家を 3 人目の副査として招聘した。

福山氏は、2012 年 4 月に本大学院観光創造専攻修士課程に入学し、2015 年 3 月に「条件不利環境の観光資源化とその活用促進メカニズム～『雪氷観光』の創造事例を対象として」とする修士論文で修士号を取得した。2015 年 4 月より観光学高等研究センターの学術研究員および博士研究員として勤務する傍ら、雪氷観光に関する研究を進め、本論文を執筆した。

論文の目的は、地域に与えられた条件不利環境を「受容すべき環境」ではなく「働きかけるべき資源」として対象化し、地域がそれを観光資源化していく一連のプロセスを解明することで、その「活用促進メカニズム」を明らかにすることである。そのため、北方圏地域における社会経済や日常生活に実害をもたらす冬季の雪氷に焦点をあて、それを観光資源化する「雪氷観光」の創造事例を主に取り上げている。

本研究の成果は、主に以下の 3 点にまとめることができる。

1 点目は、国内のあらゆる冬期観光事例の分析と観光学等における定義の検証から「雪氷観光」を「余暇時間における生活の変化を求める人間の文化的な欲求を充足する行為のうち、日常生活圏を離れ、物質・現象としての雪氷を、直接・間接消費する多様な一連の行動」と定義づけ、その特性に基づく類型化を示したことで、「雪氷観光」を社会が認知できるようにした点である。

2 点目は、雪氷観光の成功事例である紋別市の流氷観光とキルナ市（フィンランド）のアイスホテルの事例の調査に基づき、以下のような観光資源化プロセスの特徴を明確化し条件不利環境としての雪氷の活用促進メカニズムとして提示した点である。すなわち、雪氷の価値形成過程が両事例ともに4つのフェーズに区分でき、さらに価値創造のアプローチの機能を「文化的ブランディング」「文化的マーケティング」「科学的ブランディング」「科学的マーケティング」の4類型で説明可能であることを示し、これを条件不利環境である雪氷を活用促進する合理的なメカニズムであるとして提示した。

3 点目は、条件不利な雪氷の克服と活用実現に対する個々の欲求が、広く地域社会における「雪氷観光」の創造につながることで、および文化と科学の両効力が相互補完的に影響し合う共在性の意義を示すことで、雪氷の活用促進メカニズムの他資源への応用可能性を提示した点である。

これらの研究成果の説明に対し、試問では以下の質疑がなされた。

まず評価できる点に関するコメントとしては、「研究対象の独自性が高い」「紋別に関する地元新聞の膨大な調査により経緯を統計的にも明らかにした点は高く評価できる」「雪氷学の分野に『雪氷観光』という新たなジャンルを創り出した」「自然科学と人文科学の接合を図った意欲的な研究である」等の点が挙げられた。

質問としては、「用語の定義や分析の枠組みに関する説明が不十分ではないか」「事例研究で検証された内容に基づき学術的に解決策を出すことにつなぐ考察が不十分で学問的貢献がわかりにくいのではないか」「事例分析にとどまらない条件不利環境の一般化に向けた考察が不足していないか」「活用促進メカニズムにおける科学と文化の相互補完性と共在性について無批判な二元論になっていないか」「メディアがつくるイメージといったメディア論からの分析やマーケティングの議論が不足していないか」との指摘があった。

これらの質問に対し、執筆者より論文内で説明し切れていない内容についての口頭による補足と、研究で特定した活用対象の属性（物質・非物質）による応用可能性と限界性、および今後の研究課題として残すものに関する的確な回答がなされた。

これらの質疑応答において、執筆者は始終適切かつ誠実さをもって対応し、本博士論文の意義と成果、そしてその限界と発展可能性についての的確に認識していることが確認された。

以上の公開口頭試問終了後、4人の主査・副査のみで審査が行われ、口頭試問における執筆者の回答を含めることで、一貫性のある完成度の高い論文となっていることが了解された。さらに、文化・科学両面から見る取組みにまとめ上げ、人文系と理学系の融合を図った点は雪氷学・観光学両分野の前進であり、福山貴史氏の博士論文は、高い学術的価値と独創性を有すとの評価がなされた。以上より、博士論文としての基準を十分に満たすものであり、本学博士学位を授与することが妥当であると、主査および副査の全員一致で判断した。